

朱子語類讀書法篇譯注(六)

興 膳 宏
京都大學

木 津 祐 子
同志社女子大學

齋 藤 希 史
京都大學

101 理明後、便讀申韓書、亦有得。方子。以下雜論。

理が明らかになってから、申韓の書物を読めば、得るところもある。李方子記す。以下、雜論。

(校勘) 朝鮮古寫本 卷十「讀書法篇上」所收。以下雜論↓缺。

(注) 「申韓」は、申不害と韓非子を指す。兩者を並列する例は、「史記云、申子卑卑、施於名實。韓子引繩墨、切事情、明是非、其極慘覈少恩、皆原於道德之意」(「戰國漢唐諸子」一三七・3253)や、「凡人著書、須自有箇規模、自有箇作用處。或流於申韓、或歸於黃老、或有體而無用、或有用而無體、不可一律觀」(同 3255)が挙げられる。

「雜論」という語は、諸子の學問を指す。下篇92條の「駁雜」

朱子語類讀書法篇譯注(六)(興膳・木津・齋藤)

の注を参照のこと。

102 諸先生立言有差處、如橫渠知言。當知其所以差處、不宜一切委之。所以自廣其志、自進其知也。

諸先生の理論には正しくないところもあるので、例えば横渠先生の「知言」。それがなぜ正しくないか理解すべきで、そのまま鵜呑みにしてはならない。それがみずから志を大きくし、知を進めることになる。(記録者名を缺く)

(校勘) 朝鮮古寫本 缺

(注) 細字の部分に「横渠知言」とあるが、『知言』は張載の著書ではなく、胡宏の著書にその名が見える。底本の「横渠」の下に付された賀瑞麟の校語には「賀疑渠下有闕」とあり、胡宏の『知言』と並列されていたであろう横渠の著作が脱落した可能性を示唆する。胡宏の『知言』と並稱される横渠の著書としては、『正蒙』があり、『語類』にもしばしば兩者が同列のものとして論じられる。例えば、「向呂伯恭初讀知言、以為只有二段是、其後却云、極妙、過於正蒙」(「中庸一章句序」六二・1457)や、「東萊云、知言勝似正蒙」(「程子門人 胡康侯」一〇一・2522)、また、「伯恭云、知言勝正蒙」(同、2523)も同じ主旨のことばである。さらに、この兩者に對する價值評價をのべたものとしては、「羅氏門人」(一〇三・2602)に「正蒙知

言、類、學者更須被他汨歿」がある。「差」は、誤る、劣る、という意味で、現代語に同じ。

「立言」は、書物を著して説を立てること。『左傳』襄公二十四年に「大上有立德、其次有立功、其次有立言」と、また『中庸章句』第一章に、「子思述所傳之意以立言」という。

103 讀書理會道理、只是將勤苦捱將去、不解得不成。「文王猶勤、而況寡德乎。」今世上有一般議論、成就後生懶惰。如云「不敢輕議前輩」、「不敢妄立論」之類、皆中怠惰者之意。前輩固不敢妄議、然論其行事之是非、何害。固不可鑿空立論、然讀書有疑、有所見、自不容不立論。其不立論者、只是讀書不到疑慮處耳。將精義諸家說相比竝、求其是、便自有合辨處。璚。

書物を讀んで道理をさとるには、ひたすらこつこつと努力していけばできないはずがない。「文王でさえ努力したのだから、徳の少ない者はなおさら」なのだ。今世間にある種の議論があつて、それが若者の怠け心のもととなつてゐる。やれ「先達を輕々しく論じるわけにいかない」だの、「みだりに理論をたてるわけにはいかない」だのというの

は、みな怠け者の意に添うものだ。先達のことを妄りに議論するわけにいかないのはもちろんだが、その事跡の是非を論じるのに、なんの不都合があろう。根據のない論をでっち上げるべきでないのは當然だが、書物を讀んで疑問が生じ、意見があれば、おのずと論を立てないわけにはいかなくなる。論を立てないのは、書物を讀んで疑問をもつまてになつていないというだけだ。「精義」の諸家の説と較べて、どちらが正しいかを追求していけば、おのずからはつきりしてくるはずだ。滕璚記す。

(校勘) 朝鮮古活字本・刊本・明本 推↓睡

朝鮮古寫本 缺

(注) 「捱將去」は、こつこつ積み上げていくこと。すでに上篇48條に、「逐旋捱去」とみえる。

「不成」は、上篇4條および、下篇40條に既出であるが、句末の用例としては本條が初出である。

「文王猶勤」は、『左傳』宣公十一年の「詩曰、文王既勤止。文王猶勤、況寡德乎」をいう。

「精義」は、二程子らによる經書への注釋書を指すが、朱子自身も、四十三歳の時に、『語孟精義』を建陽にて出版している。ただ、「論語一 語孟綱領」(卷十九)をみると、單に「精

義」といえば、多くの場合、前者を指している。たとえば、「且如精義中、惟程先生說得確實」、「精義中、尹氏說多與二程同、何也」(十九・45b)など。

「比竝」は比へ見ること。「他高者自高、低者自低、何須去比竝」(論語十五 雍也篇四「三三・85b」)の例がわかりやすい。また、本條と重なり合う内容のものとしては、「讀書、須痛下工夫、須要細看。心粗性急、終不濟事。如看論語精義、且只將諸說相比並看、自然比得正道理出來」(論語一 語孟綱領「一九・45c」)が挙げられる。

「擊空」は、下篇7條の注参照。

104 因言讀書法、曰、「且先讀十數過、已得文義四五分、然後看解、又得三三分、又却讀正文、又得一二分。向時不理會得孟子、以其章長故也。因如此讀。元來他章雖長、意味却自首末相貫。」又問讀書心多散亂。曰、「便是心難把握處。知得此病者、亦早少了。向時舉中庸『誠者物之終始、不誠無物』、說與直卿云、『且如讀十句書、上九句有心記得、心不走作、則是心在此九句內、是誠、是有其物、故終始得此九句用。若下一句心不在焉、便是不誠、便無物也。』」明作。以下論看注解。

朱子語類讀書法篇譯注(六)(興膳・木津・齋藤)

讀書の方法を論じたついでにおっしゃった。「まずは十數回讀み、四五割がた文義をつかんで、それから注解を讀むと、さらに二三割わかるようになり、もう一度本文を讀めば、また一二割わかるようになる。かつて『孟子』を讀んでもわからなかったのは、その章が長いせいだった。そこで、このように讀んだ。その章は長いとはいえ、そもそも内容は首尾一貫していたのだ。」また、讀書の際に、心がふらふらがちなことを問うと、おっしゃった。「それがつまり心の制御しがたいところだ。この難しさのわかる者も、とくに少なくなりました。いつか『中庸』の「誠なる者は物の終始、誠ならざれば物無し」を舉げて、直卿(黃勉)にいったものだ。『たとえば、十句の書を讀んで上九句を憶え込み、心が脇道にそれなければ、心はこの九句の中に存在している。これが誠であり、その物を有していることだ。だから終始この九句を生かすことができる。しかし、もしも最後の一句で心がそこになければ、それこそ「誠ならず」つまり「物無し」ということになるのだ』と。」周明作記す。以下、注解の讀み方を論ず。

(校勘) 朝鮮古活字本・刊本・明本 「他」をすべて「它」につくる。

朝鮮古寫本 「然後看解」から「因如此讀元」までが雙行にて記される。以下論看注解↓缺。

また、朝鮮古寫本のこのテキスト(九州大學圖書館藏朝鮮古寫徽州本)では、卷十一第六葉から第十七葉までの丁づけと條の配列がちょうど逆順になっており、そのままでは讀めない。すなわち、第五葉の末尾より第十七葉に飛び、以下、第十六葉十五葉とさかのぼって第六葉に至ってから、第十八葉に返ることとなる。本條は、第七葉最終條に位置しており、従って、第七葉から第六葉に逆さまにまたがる形で見える。

(注) 「把促」はしつかり自分のものとして離さないこと。「孟子云、『操則存、舍則亡。』人才一把促、心便在這裏。」(『學三論知行』九・51)

『中庸』の引用は、第二十五章の「誠者自成也、而道自道也。誠者物之終始、不誠無物。是故君子誠之爲貴。誠者非自成己而已也、所以成物也。成己、仁也、成物、知也。性之德也、合外內之道也、故時措之宜也」をいう。「中庸三 第二十五章」には、關連して次のような言が見える。

「誠者、物之終始、徹頭徹尾。」(六四・157)

「誠者、物之終始、猶言體物而不可遺。此是表裏之句。從頭改至結局、便是有物底地頭、著一些急不得。」(同・157)

「誠者、物之終始、不誠無物。誠者事之終始、不誠、比不

曾做得事相似。且如讀書、一遍至三遍無心讀、四遍至七遍方有心讀、八遍又無心、則是三遍以上與八遍、如不曾讀相似。」(同・158)

「誠者、物之終始、不誠無物。如讀書、半版以前心在書上、則此半版有終有始。半版以後、心不在焉、則如不讀矣。」(同・159)

「心不在」は、上篇71條、下篇7・11條に既出。また、「心不在焉(心ここに在らず)」は、『大學』にみえる。『大學章句』では、「傳之七章」に「心不在焉、視而不見、聽而不聞、食而不知其味」とある。

直卿は、黃榦(一一五二—一二二二)の字。『師事年放』續二六一。

「走作」は、これまでも何回か見えていた。下篇4條の注を参照。

また、本條の前半部分とほぼ同じ言が、『朱子讀書法』卷三「熟讀靜思」に見える。

105 「大凡人讀書、且當虚心一意、將正文熟讀、不可便立見解。看正文了、却着深思熟讀、便如己說、如此方是。今來學者一般是專要作文字用、一般是要說得新奇、人說得不如我說得較好、此學者之大病。譬如聽人說話一般、且從他說盡、不可勦斷他說、便以己意抄說。若如此、全不見得他

説是非、只説得自家底、終不濟事。」久之、又曰、「須是將本文熟讀、字字咀嚼教有味。若有理會不得處、深思之、又不得、然後却將注解看、方有意味。如人飢而後食、渴而後飲、方有味。不飢不渴而強飲食之、終無益也。」又曰、「某所集注論語、至於訓詁皆子細者、蓋要人字字與某着意看、字字思索到、莫要只作等閑看過了。」又曰、「讀書、第一莫要先立簡意去看他底、莫要才領略些大意、不耐煩、便休了。」祖道。

「およそ人が書物を読むには、まずは心を虚しくしてひたむきに正文を熟讀し、すぐに見解を立てたりしないこと。正文を讀んだら、さらに深く考えつつ熟讀して、それが自分のことばのようになる、それでこそよい。近頃の學ぶ者の中には、もっぱら文章を作るのに役立てようとするとする連中や、目新しいことを言つて、人よりうまくしゃべっていると思ふ連中がいるが、これらは學ぶ者にあるまじきことだ。たとえば、人の話を聞く時に、しばらくはその人の言い分を十分にしゃべらせ、途中で腰を折ったり、話を横取りしてはいけないのと同じだ。そんなふうでは、話の是非すら皆目見て取れず、自分のことを主張するばかりで、まるで

話にならない。」しばらくしてまたおっしゃった。「本文を熟讀し、一字一字を咀嚼して味わいが出てくるようにすること。理解できないところが有れば、深く考え、それでもまだわからなければ、そこで注解を讀むと、はじめて味わいがわかる。腹がすいてから食べ、喉が渴いてから飲んでこそおいしいのだ。腹もへらず、喉も渴かないのに無理に飲んだり食ったりしても、むだなだけだ。」さらにいわれた。「私の『論語集注』が、訓詁にいたるまですべて詳しくしたのは、人が私と同じように注意して一字一字を讀み、その一字一字についてしっかり考え、いいかげんに讀み過ぎないようにして欲しいからだ。」またいわれた。「書物を讀むには、第一に、先入見を持って讀まないこと。大筋がわかったばかりでめんどうくさくなり、投げ出さないこと。」曾祖道記す。

(校勘) 朝鮮古活字本 すべて「他」を「它」、「着」を「著」につくる。字字咀嚼教有味↓字字咀嚼教有味。また、「便以己意抄説」では、底本は「便以己意見抄説」に作るのだが、朝鮮古活字本・朝鮮古寫本・朝鮮版本、さらに明本ともに「便以己意抄説」につくるのによって、底本を改めた。

(注)「虚心」については、下篇21條の注を参照のこと。「一意」は、集中すること。

「見解」は、臨濟録「示衆」一に「今時學佛法者、且要求眞正見解」と見え、三浦國雄氏は、本來は佛教語であろう、とする(三浦國雄著『朱子集』九五頁)。

「勦斷」は、中斷することをいう。關連する語として、「勦說」があり、それでは、人の話を中斷させる意味になる。「上勝辯必勦說而折人以言」(『資治通鑑』唐德宗建中四年)への胡三省の注に、「此所謂勦說者、以人言未竟、勦絕其說而伸己之說也」とある。また、人の言説を剽窃する意でも用いられ、『禮記』曲禮上の「毋勦說、毋雷同」への鄭玄注に、「勦、猶擗也。謂取人之說、以爲己說」と見える。

「抄說」は、人の説をかすめ取って自説とすること。抄襲。この語と右の「勦斷」の用法には、重なり合う部分が多い。ともに、他人の言説の腰を折り、それを横取りする意で用いられている。

「不濟事」は、上篇20條の注を参照のこと。

「意味」は、上篇49條に既出。

「着意」は、事を爲すに心することをいう。「要窮理、須是着意。不着意、如何會理會得分曉」(『學三論知行』九・七〇) 讀書法を食事に譬えるのは、『語類』にしばしば見られる手法であるが、これまでも、上篇16條や44條・50條など、數多い例を見てきた。本條のように、時機をわきまえて食べることを題材とした例としては、「學二總論爲學之方」(八・134)

の「這箇物事要得不難。如飢之欲食、渴之欲飲、如救火、如追亡、似此年歲間、看得透、活潑潑地在這裏流轉、方是」や、既出の下篇98條が挙げられる。

また、本條と同様、氣のきいたことを言うために學問することを戒めた言としては、「學二總論爲學之方」の「……今人只憑一己私意、瞥見些子說話、便立箇主張、硬要去說、便要聖賢從我言語路頭去、如何會有益。此其病只是要說高說妙、將來做箇好看底物事做弄。如人喫飯、方知滋味、如不曾喫、只要攤出在外面與人看、濟人濟己都不得」(八・136)がある。

「領略」は、大筋を了解する意。「又恐他只說到這裏、入深也更有在、若便領略將去、不過是皮膚而已。又不入思慮、則何緣會進。須是把來橫看豎看、子細窮究。都理會不得底、固當去看。便是領略得去者、亦當如此看。看來看去、方有疑慮也。」(『訓門人』一一三・2743)

106 學者觀書、先須讀得正文、記得注解、成誦精熟。注中訓釋文意、事物、名義、發明經指、相穿紐處、一一認得、如自己做出來底一般、方能玩味反覆、向上有透處。若不如此、只是虛說議論、如舉業一般、非爲己之學也。曾見有人說詩、問他關雎篇、於其訓詁名物全未曉、便說、「樂而不淫、哀而不傷。」某因說與他道、「公而今說詩、只消這八字、

更添『思無邪』三字、共成十一字、便是一部毛詩了。其他三百篇、皆成渣滓矣。」因憶頃年見汪端明說、「沈元用間和靖、『伊川易傳何處是切要。』尹云、『體用一源、顯微無間』此是切要處。」後舉似李先生、先生曰、「尹說固好。然須是看得六十四卦、三百八十四爻都有下落、方始說得此話。若學者未曾子細理會、便與他如此說、豈不誤他。」某聞之悚然、始知前日空言無實、不濟事、自此讀書益加詳細云。此一段、係先生親書示書堂學者。

學ぶ者が書物を讀むには、まず正文を讀みこみ、注解を憶えこみ、じっくりくるまで口に出して唱えること。注の中の、文意、事物、名義の解説、經の意味を明らかにし、それらを通じさせ結びつけているところを、一つ一つ見極めて、さながら自分の書いたものようになってこそ、よく味わうことができ、その先に向けての見通しが得られる。そうでなくて空虚な議論ばかりしては、受験勉強と同じで、自分のための學問にはならない。かつて詩を論じている人に、「關雎」篇について問うたところ、訓詁・名物などについてはなんにも知らずに、「樂しみて淫せず、

哀しみて傷らず」と答えたので、私はいつてやった。「あなたはいま『詩』を論じて、たった八字ですませましたね。それに『思無邪』の三字を加えれば、あわせて十一字になって、それが『毛詩』のすべてというわけですね。その他の三百篇はみなしほり粕同然というわけですか。」それにつけて思い出すのは、いつか汪端明がいわれた、「沈元用が尹和靖に、伊川の『易傳』ではどこが肝心か、と問うたところ、尹は、『體用一源、顯微無間』こそが肝心だと答えた」という話だ。後に私が李先生に向かってこのことを話題にしたところ、先生は「尹の説はもちろん正しい。ういえるのだ。學ぶ者がまだ細かな點までわかっていないうちに、そう説き聞かせたのでは、彼を誤らせることになるんじゃないか」とおっしゃった。私はそれを聞いてはっとした。そして始めてそれまでいっていたのは中身の無い役立たずのことと悟り、以後いつそう綿密に讀書するようになった。この一段は、先生みずからが教室の學生に書き示してくださいましたものである。

〔校勘〕朝鮮古活字本 渣滓↓査滓、和靖↓和靜
朝鮮古寫本 缺

〔注〕「認得」は「體認」にほぼ同じ。體得する、味わいとる。
下篇41條に既出。

「向上」は、先に向けての意。「今之學者、直與古異、今人只是強探向上去、古人則逐步實做將去。」〔學二 總論爲學之方〕八・136)

「畢業」は、科擧受験のための勉強を指す。「以科擧爲爲親、而不爲爲己之學、只是無志。以畢業爲妨實學、不知曾妨飲食否、只是無志也」〔學七 力行〕一三・246)とあるように、次の注に述べる「己の爲の學問」と對比的にとらえられることが多い。

「非爲己之學」は、『論語』憲問の「古之學者爲己、今之學者爲人」を踏まえる。

「樂しみて淫せず、哀しみて傷らず」は、『論語』八佾「子曰、關雎、樂而不淫、哀而不傷」を指す。また、「思無邪」は、『論語』爲政の「子曰、詩三百、一言以蔽之、曰思無邪」を踏まえる。いずれも、『詩』に對する『論語』の評をそのまま受け賣りしていることを示す。

汪端明は汪應辰(一一一八〜一一七六)のこと。『宋元學案』卷四六に「玉山學案」がある。それによると、汪應辰は、字は聖錫、信州玉山の人、文定公、玉山先生と稱される。端明殿學士として知平江府となる。朱子と學問の交流があり、『玉山文

集』には「與朱元晦」が收められ、朱子のために祭文を遺している。また、汪應辰が福州知縣であったとき、召されて敷文閣學士となり、その後任に朱子を推薦したとある。

沈元用は沈晦(一〇八四〜一一四九)のこと。『宋元學案』

卷二七「和靖學案」に「和靖門人」として記される。元用は字。尹和靖の答えに見える程氏の言は、『程氏易傳』易傳序「至微者理也、至著者象也。體用一源、顯微無間」を指す。また、尹和靖は、尹焯(一一〇七〜一一四二)のこと。程伊川の弟子。『宋元學案』卷二七に「和靖學案」がみえ、『語類』にも「程子門人 尹彥明」(一〇一・2561〜2578)の章が立てられる。そこからは、程子の言いつけを墨守して學問をする、尹焯の篤實な姿が浮かび上がる。

李先生は、李侗(一〇九三〜一一六三)のこと。字は愿中、南劍の人。朱子の師であり舅父でもある。『宋元學案』卷三九「豫章門人」に詳しい傳が見え、『語錄』の「羅氏門人 李愿中」(一〇三・2600〜2604)からも多くの關連する言が引用される。

「舉似」は、取り上げて話題にすること。「舉向」に同じ。『明道云、欲令如是觀仁、可以得仁之體。先生再三舉似、曰、

這處極好看仁。』〔論語十五 雍也篇四一三三・88〕また、『宋元學案』卷二七「和靖學案」所收の沈晦傳には、本條のこの部分が引かれるが、そこでは、「舉似」を「舉問」に作る。

「渣滓」は「かす」や「おり」の意。「査滓」も同じ。「天地

初間只是陰陽之氣。這一箇氣運行、磨來磨去、磨得急了、便拶許多渣滓、裏面無處出、便結成箇地在中央」(「理氣上 太極天地上」一・6)や、「地者、氣之渣滓也。所以道、輕清者爲天、重濁者爲地。」(同上)

「消八字」の「消」は、「用」に同じ。

「悚然」は、ぎくくとすること。「因舉小南和尚少年從師參禪、一日偶靠倚而坐、其師見之、叱曰、得恁地無脊梁骨。小南悚然、自此終身不靠倚坐。」(「訓門人九」一一一・2946)

「下落」は下篇26條參照。

條末の「……云」は、恐らく記錄者の立場から書き加えられたものであろう。本條と同じ言を記錄する『朱子讀書法』卷一「熟讀靜思」には、その「云」を缺いている。

107 凡人讀書、若窮得到道理透處、心中也替他快活。若有疑慮、須是參諸家解熟看。看得有差互時、此一段終是不穩在心头、不要放過。敬仲。

およそ讀書するに、道理が明らかになるまでつきつめれば、心の中もそれですっきりする。疑問の箇所があれば、諸家の説を參照して熟讀すること。諸説の食い違いが見えてくると、その一段が始終心の中で落ちつかなくなるが、決して手放してはいけない。游敬仲記す。

朱子語類讀書法篇譯注(六)(興膳・木津・齋藤)

(校勘) 朝鮮古活字本 他↓它

(注) 「替他」について、底本の細字注に、饒本では「替他」に作ることを指摘する(正中書局本・朝鮮古活字本はともに同じ、但し「替他」に作る)。「替他」では、解釋が困難であることから、底本は「替他」に訂正したのであろう。一方、本條と同じ言が『朱子讀書法』卷一「熟讀靜思」に見えるが、そこでは同じ箇所を「潛地」に作る。これも、饒本の「替他」を解し難いための訂正であろうが、それに従うのであれば、「心の中もそれですっきりする」は、「心の中も内からすっきりする」というような意味にならうか。

「快活」は、讀書法上49條の注參照。

「差互」は、食い違うこと。「問、程門諸公親見二先生、往往多差互。如游定夫之說、多入於釋氏。龜山亦有分數。」(「程子門人 總論」一〇一・2956)

「放過」は放り出すこと。「某問、明性須以敬爲先。曰、固是。但敬亦不可混淪說、須是每事上檢點。論其大要、只是不放過耳。大抵爲己之學、於他人無一毫干預。聖賢千言萬語、只是使人反其固有而復其性耳。」(「學二 總論爲學之方」八・133)

108 凡看文字、諸家說有異同處、最可觀。謂如甲說如此、且擗扯住甲、窮盡其詞、乙說如此、且擗扯住乙、窮盡其詞、兩家之說既盡、又參考而窮究之、必有一真是者出矣。學蒙。

およそ文章を読むのに、諸家の説に異同の有るところこそ、読みごたえがある。つまり、甲の説がこうなら、しばらく甲の説を取ってきて、その主張を徹底的につきつめる。乙の説がこうなら、しばらく乙の説を取ってきて、その主張を徹底的につきつめるのだ。兩者の説がつきつめられたら、さらに互いを照らし合わせて追究すれば、必ず一つの眞實が出てくるはずだ。林學蒙記す。

(校勘) 朝鮮古活字本・古寫本 参考↓參攷

朝鮮古寫本 學蒙(記錄者名)↓公謹 また、109條に述べた理由により、本條は第六葉から第十八葉に分斷されて記錄される。

(注) 「掃摺」は、取り出すこと。「掃摺」も同じ。

『朱子讀書法』卷一「熟讀靜思」に、本條とほぼ同じ言が記錄される。

(記錄者) 林學蒙 字は正卿、福州永福縣の人。『師事年攷』續二八七。

109 經之有解、所以通經。經既通、自無事於解、借經以通乎理耳。理得、則無俟乎經。今意思只滯在此、則何時得脫然會通也。且所貴乎簡者、非謂欲語言之少也、乃在中與不

中爾。若句句親切、雖多何害。若不親切、愈少愈不達矣。某嘗說、「讀書須細看得意思通融後、都不見注解、但見有正經幾箇字在、方好。」大雅。

經に注解があるのは、經に通ずる手段だ。經に通じたら、注解には用がなくなる。經を手がかりにするのは理に通ずるためなのだ。理がつかめたら、經に頼るまでもなくなる。いま考えがずっとそこに滯ったままでは、いつはらりと會得することができよう。また簡潔さが大切なのは、ことを少なくしようとするのではなく、的を射ているかどうかということだ。一句一句がびたりと所を得ていなければ、ことばが多くても構わない。それが所を得ていなくて、ことばが少なければいよいよわからなくなる。わたしはかつていったことがある。「書物を読むには細心に読んで、意味がよく納得できるようになると、注解は一切目に入らず、ただ經の正文の何文字かだけが見えてくる、それでこそよいのだ」と。余大雅記す。

(校勘) 朝鮮古寫本 但見有正經幾箇字在↓但見有正經幾個字

(注) 「脱然」は、目から鱗が落ちるような状態をいう。「忽

然」とほぼ同義。「一物格而萬理通、雖顔子亦未至此。但當今日格一件、明日又格一件、積習既多、然後脫然有箇貫通處」(大學五 或問下 傳五章「一八・391)など。

「親切」は、ぴったりすること。『語類』には數多くの用例が見える。

なお、本條の、注解は經に通ずるための手段、經は理に通ずるための手段と捉える考え方は各所で表明されるが、「胡氏門人 張敬夫」において、張南軒の『孟子』論の文章があまりうまくないことを受け、理が明らかになれば十分なのだ、と語る次の例がわかりやすいであろう。「……要之、經之於理、亦猶傳之於經。傳、所以解經也、既通其經、則傳亦可無。經、所以明理也、若曉得理、則經雖無、亦可。」(胡氏門人 張敬夫「一〇三・2607)

110 句心。方子。

句は心だ。李方子記す。

(注) 『語類』中で最も短い條。「句」は、前條を始めこれまでの用例から判断しても、經や注の文章を指すから、「句心」は、詩文における「文心」という語に近いのではないかと考えられる。『文心雕龍』序志篇に「夫文心者、言爲文之用心也」といい、こゝも、經・注を読む際の心構えを論ずるものと理解される。

朱子語類讀書法篇譯注(内)(興膳・木津・齋藤)

111 看注解時、不可遺了緊要字。蓋解中有極散緩者、有緩急之間者、有極緊要者。某下一字時、直是稱輕等重、方敢寫出。上言句心、即此意。方子。

注解を読む時には、肝心な文字を見落としてはならない。注解の中には、極めて散漫なもの、緩急の間に有るもの、極めて重要なものがある。私が一つの文字を選ぶ時には、よくよくその輕重を勘案して、はじめて筆を取る。先に「句心」というのは、このことだ。李方子記す。

(注) 「散緩」「緩急之間」「緊要」の三項に關しては、下篇46條の注を参照のこと。このように、朱子は經や注の文章に、緩急の差があることをしばしば述べるが、その具體的な例を挙げた箇所としては、「易三 綱領下」(六七・165)に、「聖人作易、有說得極、疏處、甚散漫。如交象、蓋是汎觀天地萬物取得來闊、往往只髣髴有這意思、故曰、不可爲典要。又說得極、密處、無縫罅、盛水不漏、如說『吉凶悔吝處』是也」などが挙げられる。ちなみに、ここでの記録者も李方子である。

また、『朱子讀書法』卷一「熟讀靜思」にも、ほとんど同じ言が見えるが、ここでは「看集注、不可遺了緊要字。蓋中有極散緩者、有緩急之間者、有極緊要者。某釋經時、每下一字直是稱輕等重、然後寫出」とあり、「看註解」は「看集注」となっている。

なお、「朱子二 論自注書」に同じ李方子の記録による、「某釋經、每下工夫、直是稱等輕重、方敢寫出」(一〇五・2626)という條が見え、本條の後半部分に重なり合う。

112 且尋句內意。方子。

まずは句中の意を探れ。李方子記す。

(注) 『朱子讀書法』卷二「虚心涵泳」に、本條と後出の119條とを繋げた「且尋句內意、隨文解義」という形で含む一條がある。

大抵讀書須是虚心、方得。聖賢說一字是一字。自家只平著心去秤停也、使不得一毫杜撰、只順他去。某向來亦杜撰說、只不濟事。今方見得分明、始知聖人一言一字不吾欺、只今六十一歲、方理會得恁地。若或去年死也、則枉了。自今夏來覺見得、纔是聖人說話也。不少一箇字、也不多一箇字、恰恰地都不用一些穿鑿。莊子言、吾與之虛而委蛇。既虛了又要隨他曲折恁地去、今且與公說箇樣子、久之自見得。今人大抵偃塞滿胸有許多伎倆、如何便得他虛、亦大是難。某所以讀書、自覺得力者只是不先立議論。且尋句內意、隨文解義。今人讀書、多是心下先有箇意思了、却將聖賢言語來湊他意思、其有不合則便穿鑿之使合。

この記録の冒頭から「又大是難」までは、「自論爲學工夫」の條(一〇四・2621~2623)にほぼ等しいもので、傍點を施した九字の後に續く、「今人讀書、多是心下先有箇意思了、却

將聖賢言語來湊他意思、其有不合則便穿鑿之使合」は、既出の下篇64條の後半とほぼ同じ語である。「自論爲學工夫」の記録者は楊道夫、下篇64條の記録者は廖德明であり、『朱子讀書法』の記録が、これらの關連する條を一つにまとめたものであることは確かであろうが、後出119條の「隨文解義」という語の記録は本條と同じ李方子であるので、意味の上からも、本條と119條とが本來一つの記録であった可能性は否定できない。

113 凡讀書、須看上下文意是如何、不可泥著一字。如揚子、「於仁也柔、於義也剛。」到易中、又將剛來配仁、柔來配義。如論語、「學不厭、智也、教不倦、仁也。」到中庸又謂、「成己、仁也、成物、智也。」此等須是各隨本文意看、便自不相礙。淳。

およそ書物を讀むには、必ず前後の文意がどうかを見るべきで、一字に拘泥してはならない。例えば『揚子法言』の「仁におけるや柔、義におけるや剛」は、『易』では、剛を仁に配し、柔を義に配している。『論語』の「學びて厭わざるは、智なり。教えて倦まざるは、仁なり」は、『中庸』では、「己を成すは仁なり。物を成すは智なり」となっている。これらはそれぞれ本文の意に従って讀みさえす

れば、おのずと矛盾はなくなる。陳淳記す。

(校勘) 朝鮮古寫本 上下文意↓上下之意

明本 泥著↓泥着

(注) 「泥著」は、こだわること。「問、敬鬼神而遠之。曰、此鬼神是指正當合祭祀者。且如宗廟山川、是合當祭祀底、亦當敬而不可褻近泥著。才泥著、便不是。」〔論語十四 雍也篇三三三・三一八〕

「揚子」の引例は、揚雄『法言』君子篇の「或問、君子之柔剛。曰、君子於仁也柔、於義也剛」を指す。

『易』は、説卦傳の「昔者聖人之作易也、將以順性命之理、是以立天之道、曰陰與陽。立地之道、曰柔與剛。立人之道、曰仁與義」を指す。

本條で『論語』として引用される言は、實際は『孟子』公孫丑篇上の子貢のことばであるが、その語は『論語』述而篇の「子曰、默而識之、學而不厭、誨人不倦、何有於我哉」を踏まえるものである。『朱子讀書法』卷二「虚心涵泳」の本條に該当する部分では、『孟子』として引用する。

『中庸』の引用は、第二十五章の文。

114 問、「一般字、却有淺深輕重、如何看。」曰、「當看上下文。」節。

「同じ文字でも、深淺輕重の違いが有りますが、どのよ
朱子語類讀書法篇譯注(六)(興膳・木津・齋藤)

うに讀めばよいでしょう」と問うと、いわれるには、「前後の文を讀みなさい」。甘節記す。

(校勘) 朝鮮古寫本 問↓節問

(注) 本條と次條は、理解のため前後の文脈を讀むことを勧めが、この主張は、上篇87條に既にみえるものである。

115 讀書、須從文義上尋、次則看注解。今人却於文義外尋索。蓋卿。

書物を讀むには、まず文意の上から探り、それから注解を讀むのだ。このごろの人ときたら、文意の外で探っている。龔蓋卿記す。

(注) 「尋索」は、探り求めること。「砥初見、先生問、曾做甚工夫。對以近看大學章句、但未知下手處。曰、且須先操存涵養、然後看文字、方始有浹洽處。若只於文字上尋索、不就自家心裏下工夫、如何貫通。」〔訓門人七〕一一九・2871)

『朱子讀書法』卷二「虚心涵泳」に本條と同じ言が記録される。

(記錄者) 龔蓋卿 字は夢錫、衡州常寧の人。『師事年攷』二八一。

116 傳注、惟古注不作文、却好看。只隨經句分說、不離經意、最好。疏亦然。今人解書、且圖要作文、又加辨說、百般生疑。故其文雖可讀、而經意殊遠。程子易傳亦成作文、說了又說。故今人觀者更不看本經、只讀傳、亦非所以使人思也。大雅。以下附論解經。

傳や注では、古注のみが作文をしておらず、氣持ちよく讀める。もっぱら經の句ごとに説きわけていて、經の内容から離れていないのが、何よりよい。疏についても同じだ。近頃の人は書物に注解を施すのに、作文してやろうとし、さらに議論を加えるので、あれこれと疑わしいところが生じる。だからその文は讀むには讀めても、經の内容からはほど遠くなってしまうのだ。程子の『易傳』でもやはり作文になっていて、説きに説いている。だから近頃の者が讀む場合、經の本文をちっとも讀まずに、傳ばかりを讀んでいるが、それでは人に考えさせることにはならない。余大雅記す。以下、經に解を施すことについての附論。

(校勘) 朝鮮古活字本 說了又說↓說了文說

朝鮮古寫本 却好看↓故好看、以下附論解經↓缺

(注) 「作文」は、經の本文から離れ、私意にもとづいて勝手に注解の文章を作ること、朱子はこれを強く戒めている。朱子にとっては「道」と「文」は不可分のものでなければならぬ。

道者、文之根本、文者、道之枝葉。惟其根本乎道、所以發之於文、皆道也。三代聖賢文章、皆從此心寫出、文便是道。今東坡之言曰、「吾所謂文、必與道俱。」則是文自文而道自道、待作文時、旋去討論道來入放裏面、此是它大病處。只是它每常文字華妙、包籠將去、到此不覺漏逗。說出他本根病痛所以然處、緣他都是因作文、却漸漸說上道理來。不是先理會得道理了、方作文、所以大本都差。歐公之文則稍近於道、不爲空言。如唐禮樂志云、「三代而上、治出於一、三代而下、治出於二。」此等議論極好、蓋猶知得只是一本。如東坡之說、則是二本、非一本矣。(「論文上」一三九・三三九)

自晉以來、解經者却改變得不同、如王弼郭象輩是也。漢儒解經、依經演繹。晉人則不然、捨經而自作文。(「易三綱領下」六七・1675)

また、「作文章」「作文字」「做文字」などの語によっても、同様の戒めが述べられる。「南軒語孟子、嘗說他文字不好看。蓋解經不必做文字、止合解釋得文字通、則理自明、意自足。今多去上做文字、少間說來說去、只說得他自一片道理、經意却蹉過了。」(「胡氏門人 張敬夫」一〇三・2607) など。

「分説」は筋道立てて説明すること。「分疏」も同じ。『語類』には「分疏」の用例が多い。例えば、「五峰疑孟之說、周遮全不分曉。若是恁地分疏孟子、剗地沈倫、不能得出」(『論語十一 公治長下』二九・38)、「程子門人 胡康侯」一〇一・2595にもほぼ同じ言が再録される)など。

『程子易傳』については、「易三 綱領下」(六七・1649~1654)に專論があり、本條と關連する批評に、次のようなものがある。

伊川易煞有重疊處。(六七・1652)

……若易傳、却可脫去本文。程子此書、平淡地慢慢委曲、說得更無餘蘊。不是那敲磻逼拶出底、義理平鋪地放在面前。只如此等行文、亦自難學。如其他峭拔雄健之文、却可做。

若易傳樣淡底文字、如何可及。(同・1653)

また「訓門人五」(一一七・382)にも、「若易傳、則卒乍裏面無提起處。蓋其間義理闊多、伊川所自發、與經文又似隔一重皮膜、所以看者無箇貫穿處。蓋自孔子所傳時、解『元亨利貞』已與文王之詞不同、伊川之說又與經文不相著。讀者須是文王自作文王意思看、孔子自作孔子意思看、伊川自作伊川意思看。」という評が見える。

117 解經謂之解者、只要解釋出來。將聖賢之語解開了、庶易讀。泳。

朱子語類讀書法篇譯注(六)(興膳・木津・齋藤)

經の解釋を「解」というのは、ひたすら解き釋くからだ。聖賢の言葉解きほぐせば、讀みやすくなる。湯泳記す。

(注) 「解釋」という語については、「小年更讀左傳『形民之力、而無醉飽之心』、意欲解釋『形』字是剗剗之意、醉飽是厭足之意、蓋以爲剗剗民力而無厭足之心」(『易六 師 比』七〇・1752)などの用例が見える。

118 聖經字若箇主人、解者猶若奴僕。今人不識主人、且因奴僕通名、方識得主人。畢竟不如經字也。泳。

經書の文章は主人のようなもので、解はいわば召使いだ。いまの人は主人と面識がなく、召し使いに取り次いでもらって、ようやく主人を知る。それでも結局經の本文(に直接觸れる)にはおよばない。湯泳記す。

(校勘) 朝鮮古寫本 箇↓个、泳(記錄者名) ↓缺
(注) 「通名」は姓名を告げて、面識を求めること。

119 隨文解義。方子。

經の本文に従って義を解釋すること。李方子記す。

(注) 同様の主張は前出の第二條にも見られた。また、本條は、同じ李方子の記録になる前出第二條と同一條であった可能

「性があるが、それについては二三條の注を参照のこと。

120 解經當如破的。方子。

經を解釋するには、的を射ぬくようにしろ。李方子記す。

(注) 「破的」は矢で的に命中させることをいうが、本條のよ
うに、急所を突く發言をするたとえとしての用法は、『世說新
語』品藻篇に「韶言令辭不如我、往輒破的勝我」とあるなど、
古くから見られる。

121 經書有不可解處、只得闕。若一向去解、便有不通而謬
處。

經書に解釋できないところが有れば、そのままにしてお
くよりほかはない。もしもあくまで解釋しようとするれば、
通せずにあやまつところが出てくる。記録者名を缺く。

(校勘) 朝鮮古寫本 缺

(注) 『朱子讀書法』卷二「虚心涵泳」に同じ言が見えるが、
そこでは「經書有不可解處、只得闕、若一向去解、便有謬處」
となっている。

本文の主張に同調する言として、「知尙書收拾於殘闕之餘、
却必要句句義理相通必至穿鑿。不若且看他分明處、其他難曉者
姑闕之、可也」(尙書一綱領「七八・1983」)が挙げられる。

これらの、「只得闕」や「姑闕之」からは、『論語』爲政篇上の
「多聞闕疑、慎言其餘、則寡尤、多聞闕殆、慎行其餘、則寡悔」
や、衛靈公篇の「吾猶及史之闕文也」が想起される。

122 今之談經者、往往有四者之病。本卑也、而抗之使高、
本淺也、而鑿之使深、本近也、而推之使遠、本明也、而必
使至於晦、此今日談經之大患也。蓋卿。

いまの經書を論ずる者には、往々にして四つの惡弊があ
る。本來低いものを、もち上げて高くしようとし、浅いも
のを、鑿って深くしようとし、近いものを、遠くへ押しや
ろうとし、明らかなものを、決まって分かりにくくしてし
まう。これが昨今の經書を論ずる者の大きな缺陷だ。龔蓋
卿記す。

(校勘) 朝鮮古寫本 缺

(注) 經書の内容の捉えかたについて、高低や遠近を對比して
述べる例は、上篇33條に「寧詳毋略、寧下毋高、寧拙毋巧、寧
近毋遠」が挙げられる。『朱子讀書法』卷二「虚心涵泳」に本
條と同じ言が記録されるが、その箇所の前には、「人之讀書、
寧失之拙、不可失之巧、寧失之卑、不可失之高」のような文も
記録されている。

123 後世之解經者有三。一、儒者之經。一、文人の經、東

坡陳少南輩是也。一、禪者之經、張子韶輩是也。

後世の經書の解釋には三種ある。一つは儒者の經。一つは文人の經で、蘇東坡、陳少南らがそれである。一つは禪家の經で、張子韶らがそれである。記録者名を缺く。

(校勘) 朝鮮古寫本 缺

(注) 蘇軾の學問については、各所に言及が見える。「本朝四自照寧至靖康用人」(一一三〇・3110)や、「易三綱領下」の「東坡解易、大體最不好。然他却會作文、識句法、解文釋義、必有長處」(六七・1663)、「東坡易說、六箇物事、若相咬然。此恐是老蘇意。其他若佛說者、恐是東坡」(六七・1676)。また、「東坡書解卻好、他看得文勢好」(尙書一綱領)七八・1986)など。

陳少南は陳鵬飛の字。「宋元學案」卷四四の「趙張諸儒學案」に、「員外陳少南先生鵬飛」として傳が立てられる。それによると、陳鵬飛は永嘉の人で、紹興十二年の進士。仕官せず、經術文詞をもって學生數百に教えるも、秦檜に罪を得て、惠州に没した。『詩傳』二十卷や『管見集』十卷などの著作がある。その詩説では、「語類」でも次のように言及するように、魯頌を廢すべしとしたことが有名である。

又曰、陳少南要廢魯頌、恣煞輕率。它作序、却引思無邪之說。若廢了魯頌、却沒這一句。(論語五 爲政篇上 詩三

朱子語類讀書法篇譯注(興膳・木津・齋藤)

百章」(一一三・542)

また、「本朝六 中興至今日人物」(一一三二・3173)に、その學問全體への朱子の評が見える。

張子韶は、張九成のこと、横浦居士と號した。『宋元學案』卷四〇に、「横浦學案」が立てられる。それによると、錢塘の人で、太常博士、著作郎、宗正少卿を経て、禮部侍郎兼侍講經筵となる。崇國公に封ぜられ、文忠と諡される。佛に歸依したことは、そこにも記されるが、『語類』中では、「……如果佛日之徒、自是氣魄大、所以能鼓動一世、如張子韶汪錫輩皆北面之」(釋氏)一二六・3029)や、「張子韶人物甚偉、高廟時除講筵。……張侍郎(張子韶)一生學佛、此是用老禪機鋒」(本朝一 高宗朝)一二七・3057~58)などの評が見える。

124 解書、須先還他成句、次還他文義。添無緊要字却不妨、添重字不得。今人所添者、恰是重字。端蒙。

經書に注解をほどくすには、まずその句に立ち返り、次にその文義に立ち返ること。大切でない文字をつけ加えるのは構わないが、大切な文字を加えてはいけない。いまの人がつけ加えているのは、まさに大切な文字なのである。程端蒙記す。

(校勘) 朝鮮古活字本 他↓它

朝鮮古寫本 缺

(注) 「無緊要字」に「虚字」が、「重字」に「實字」が對應する形で同趣旨の主張が述べられているものとして、次の例が挙げられる。

且如解易、只是添虚字去迎過意來、便得。今人解易、廼去添他實字、卻是借他做己意說了。(「易三 綱領下」六七・1601)

125 聖賢說出來底言語、自有語脈、安頓得各有所在、豈似後人胡亂說了也。須玩索其旨、所以學不可以不講。講學固要大綱正、然其間子細處、亦不可以不講。只緣當初講得子細、既不得聖賢之意、後來胡亂執得一說、便以爲是、只胡亂解將去。譬。必大錄此下云、古人似未管理會文義。今觀其說出底言語、不曾有一字用不當者。

聖賢が語ったことばには、おのずから脉絡があり、その場にぴたり當てはまるように置かれている。後の時代の人がでまかせに説くようなものではない。その内容は深く味わねばならぬから、學問は講ずることが缺かせないのだ。講論では、大綱をきちんとしておかねばならないことは言うまでもないが、その間の細かなところもまた、講じ

ないわけにはいかない。最初に細かく講じなかったために、聖賢の意を理解できず、後になって一つの説にむやみに固執して、それが正しいとし、でまかせに解釋していくよりほかなくなるのだ。黄魯記す。必大の記録には次のようにいう、「古人は文義は問題にしていなかったようなのに、語られたことばをいま見てみると、一字としての外れなものはない。」

(校勘) 朝鮮古寫本 「必大錄此下云」以下↓缺

(注) 「安頓」は、置く、落ちつかせること。「今公掀然有飛揚之心、以爲治國平天下如指諸掌。不知自家一箇身心都安頓未下落、如何說功名事業、怎生治人。」(「訓門人四」一六・2801)

「胡亂」はでたらめにする。上篇97條の注を参照。

「玩索」は、上篇64條の注を参照。

「語脈」は文脈のこと。上篇87條に既出。また、次のような用例が見える。

問、誠者、物之終始、不誠無物。是實有是理、而後有是物否。曰、且看他聖人說底正文語脈、隨誠者物之終始、却是事物之實理、始終無有間斷。(「中庸三 第二十五章」六四・1578)

「講學」は學問を講論すること。「胡籍溪人物好、沈靜謹嚴、

只是講學不透」(『程子門人 胡康侯』一〇一・258)。また、「講論」という語も使われるが、それは下篇77條に既出。

『朱子讀書法』卷四「虚心涵泳」に、本條の冒頭から「不可
以不講」までが見える。

126 解經、若於舊說一向人情他、改三字不若改兩字、改兩
字不若且改一字、至於甚不得已乃始改、這意思終爲害。升
卿。

經書に注解をほどこす際に、舊說に對してむやみに情を
移してしまつと、三字を改めるより二字の方がいい、二字
より一字の方がいいとなり、ひいてはどうしてもやむを得
なければ始めて改めるといふことになるが、こんな考えは
結局わざわざいになるのだ。黃升卿記す。

(校勘) 朝鮮古活字本 他↓它

(注) 「人情」といふ語はここでは他動詞として用いられてい
るが、他には用例が見出しがたい珍しい例である。

127 凡學者解書、切不可與他看本。看本、則心死在本子上。
只教他恁地說、則他心便活、亦且不解失忘了。壽昌。

學生に經書を解釋させるに際しては、決して彼に本を見

朱子語類讀書法篇譯注(9)(興膳・木津・齋藤)

させてはいけない。本を見ていると、心が本の上で動けな
くなってしまふ。ともかくそのまま論じさせれば、心も生
き生きとしてくるし、忘れることも無くなるはずだ。吳壽
昌記す。

(校勘) 朝鮮古活字本 「他」をすべて「它」につくる。
朝鮮古寫本 缺

(注) 「不解」は「不會」に同じ。

「失忘」は「忘記」に同じ。

同趣旨の主張は、上篇21條および68〜71條にかけて集中して
みられる。

128 「學者輕於著書、皆是氣識淺薄、使作得如此、所謂『聖
雖學作兮、所貴者資。便儂皎厲兮、去道遠而』。蓋此理醜
厚、非便儂皎厲不克負荷者所能當。子張謂『執德不弘』、
人多以寬大引『弘』字、大無意味、如何接連得『焉能爲有
焉能爲亡』、文義相貫。蓋『弘』字有深沈重厚之意。橫渠
謂、『義理、深沈方有造、非淺易輕浮所可得也。』此語最佳。」
問、「集注解此、謂『守所得而心不廣、則德孤』、如何。」
曰、「孤、只是孤單。所得只是這些道理、別無所有、故謂

之徳孤」。談。論著書。

「學ぶ者が軽々しく書物を著すのは、すべて器量と見識の淺さがそうさせるのだ。いわゆる『聖は學んで作るとは雖も、貴ぶ所のは資なり。便儼皎厲なれば、道を去ること遠し』ということだ。というのは、理というやつは濃くて深いものだから、賢こそうに偉ぶっていて重荷にたえない者がそれに當たることはできない。子張の『徳を執りて弘からず』ということばについて、『弘』を寛大という意味に訓ずる者が多いが、まったく意味をなさない。それではどうして『焉んぞ能く有りと爲し、焉んぞ能く亡しと爲さんや』につながって、文義が通るだろう。『弘』の字には深沈重厚の意があるからだ。張横渠が、『義理は深沈にして方めて造る有り。淺易輕浮の得べきものに非ざるなり。』といっているが、このことばは大變よい。」また問うた。「集注でここを解釋して、『得る所を守りて心廣からざれば、則ち徳は孤なり』といっておられるのは、いかがでしょう。」答えておっしゃるには、「孤とは、つまり孤單ということだ。『得る所』がこの道理だけで他には何もないので、

『徳は孤なり』といったのだ。」周謨 著書を論ずる。

(校勘) 朝鮮古活字本 聖雖可學兮、所貴者資、便儼皎厲兮、去道遠而↓聖雖可學、方所貴者資、便儼皎厲兮、去道遠而子張↓子夏

朝鮮古寫本 子張↓子夏 人多以寛大訓弘字↓人多以寛説弘字 論著書↓缺

(注) 「所謂」で導かれる引用は、程頤の「聖雖可學」一節を、所貴者資、便儼皎厲兮、去道遠而。展矣仲通兮、賦材特奇。進復甚有兮、其造可知。」(『河南程氏文集』卷四「李寺丞墓誌銘」)をいう。「便儼」は小才をきかせて機轉の利く様を形容するのであろう。「便翻」の形であるが、蘇軾に「蛻形濁汗中、羽翼便翻好」(『雅秀才畫草蟲八物・蟬』)という例があり、これは輕快に動く様を形容している。「皎厲」は高く自らを持すること。「不修常人之節、不爲皎厲之事、每欲容才長物、終不顯人之短」(『晋書』魏舒傳)「便儼皎厲」は、ここでは小賢しく自信たっぷりな様子をいうか。

子張のことばとは、『論語』子張篇の「子張曰、執徳不弘、信道不篤、焉能爲有、焉能爲亡」を指す。それへの『集注』の言に「有所得而守之太狹、則徳孤。有所聞而信之不篤、則道廢。焉能爲有無、猶言不足爲輕重」とある。「徳孤」は、『論語』里仁篇の「徳不孤、必有鄰」を踏まえる。また、子張篇のこの文については、本條と関連して、やはり次のような言が「論語三

十一 子張篇」(四九・1198~9)に記録されている。

執德不弘、弘は深潛玩味之意、不弘は著不得。明道云、所貴者資、便儂駁厲兮、去道遠而。此說甚好。

「問、焉能爲有、焉能爲亡。」曰、「有此人亦不當得是有、無此人亦不當得是無、言皆不足爲輕重。」

張橫渠の言は、「義理之學亦須深沈、方有造。非淺易輕浮之可得也。蓋惟深、則能通天下之志。只欲說得、便似聖人、若此、則是釋氏之所謂祖師之類也」(『張子全書』卷六 經學理窟三 義理)のこと。

「孤單」は、獨りぼっちであること。「傳教子説、明明德。

曰、大綱也是如此。只是說得恁地孤單、也不得。」(『大學』一經上「一四・286)とある。

129 編次文字、須作草簿、抄記項頭。如此、則免得用心去記他。兵法有云、「車載糗糧兵仗、以養力也。」編次文字、用簿抄記、此亦養心之法。廣。論編次文字。

文章を編むには、下書き帳を作って、項目を書き出しておくこと。こうすれば、それを記憶しておく手間が省ける。兵法の書に次のようにいっている。「車に兵糧や武器を載せるのは、體力を蓄えるためである。」文章を編むのに下書き帳を使うのも、心力を蓄えておく方法なのである。輔廣

朱子語類讀書法篇譯注(3)(興膳・木津・齋藤)

記す。文章を編むことを論ずる。

(校勘) 朝鮮古活字本 他↓它

朝鮮古寫本 論編次文字↓缺

(注) 「編次」は、文章を配列編纂すること。「追迹三代之禮、序書傳、上紀唐虞之際、下至秦繆、編次其事」(『史記』孔子世家)

「項頭」は項目のこと。「頭」は、この場合接尾辭である。

「免得」は、「くしないですむ」という意の口語。「……所謂樂之深淺、乃在不改上面。所謂不改、便是方能免得改、未如聖人從來安然。」(『論語』十三 雍也篇「三・195」)

「用心」は、心を働かせること。『論語』陽貨篇に、「子曰、飽食終日、無所用心、難矣哉。不有博奕者乎。爲之、猶賢乎已」とある。

「養心」は、『孟子』盡心篇下の「孟子曰、養心、莫善於寡欲、其爲人也寡欲、雖有不存焉者寡矣、其爲人也多欲、雖存焉者寡矣」を踏まえる。

『語類』では、戦ごとを讀書に例える例はしばしば見られるのであるが、『兵法』が具體的に何の書を指すかは不明。

「糗糧」は兵糧のこと。『尙書』費誓「時乃糗糧。」

譯注者後記 本稿作成の過程で、多田伊織・高塚あゆみ・吉川雅之・濱田麻矢の諸君による譯注の草稿を参照した。謝意を表す。